

2022/5/15

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑧

『ヨハネの黙示録 2 章前半』

神は私たちが苦しめている悪を滅ぼし、永遠の神の国を実現する——旧約聖書に記されている神の約束を、簡単に要約するところとなります。イエス・キリストは、この約束を実現するために来られました。ということは、イエス・キリストが来られたことで、神の国は実現したのです。つまり、私たちはすでに終わりの時を迎えた、ということになります。ですから、聖書は、イエス・キリストを信じる者は死からいのちに移されている、すなわち、すでに永遠のいのちを持っていると教えているのです。

すでに永遠のいのちを持っているのですから、私たちは、いつ肉体の死が訪れても心配することは何もありません。しかし、肉体の死を迎えるまでの間に、私たちは様々な苦難に出会います。そのような苦難に対して、様々な側面から繰り返し希望を語って励ましているのが、ヨハネの黙示録です。つまり、ヨハネの黙示録のテーマは、「励まし」です。

その大元になっているのは、各福音書に記されているイエス・キリストが語られた黙示録です。イエス様は、どんな困難や迫害があっても必ず神が助けるから大丈夫、信頼しなさい、と語られました。

■ エペソの教会へ

「エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」

(黙示 2:1-3)

「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方」とは、イエス・キリストのことです。「御使い」は、「エンゲドス」というギリシャ語で、「使い」「御使い」という意味があり、ここではエペソ教会の人々のことです。彼らを「御使い」と表現するのは、一つには、クリスチャンは常に御使いに守られていること、さらに、クリスチャンはすでに神の子とされた聖なる者であるからです。人は救われた後に、訓練を受けて神の子になるのではなく、すでに神の子です。そして、御使いが守るということは神が守っておられるということで、あなたは神に愛され、神が共におられるということを示す象徴的な表現なのです。

神は、クリスチャンが受けている労苦、苦しみ、忍耐をよくわかっておられます。「なぜ自分だけがこんなに苦しいのか、誰もわかってくれない」という思うことがあっても、神だけはその苦しみをわかってくださいます。あなたは一人ではありません。これが、神からのメッセージです。そして、苦しみの中にあつたとしても、肉体の死までの期間、この地上でどのように生きればよいのかを教えておられます。

「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」

(黙示 2:4)

この表現方法には、あることを説明するときに対称のことを引き合いに出して説明するというギリシャ語の手法が使われており、この御言葉の趣旨は、あなたには目指すべきゴールがあるということです。「非難すべきことがある」という表現は、聞き手を目覚めさせる言い方で、これによって、私たちが目指すべきゴールを思い起こさせようとしているのです。そのゴールとは、初めの愛をしっかり保つことです。つまり、イエス・キリストと出会った時の熱心を思い出しなさいと語られているのです。水のバプテスマを受けた時、信仰を告白した時、「神を第一にし、あなたを愛します」と心から告白した、あの熱い思いに今一度立ち返りなさい、と神は励ましておられます。つまり、私たちが目指すべきは、神を第一にするということです。

イエス・キリストを知り、永遠のいのちをいただいた私たちは、もう救いが取り消されることはありません。天国へ行くのを待つだけです。しかし、その間、何もしなくてもいいわけではありません。イエス様との関係を築き上げて生きることが大切なのです。人との関係でも、知り合いになることと、親密な関係を築くこととは違います。イエス様への信頼を増し加えて生きることが、あなたの目指す道なのです。

「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」

(黙示 2:5-7)

多くの人にとって、救われた当初、礼拝は大切なものであり、奉仕をすること、捧げることは大切なことでした。ところが、いつのまにかいろいろな言い訳をして、神の優先順位が

少しずつ下がってはいないでしょうか。この世は実に忙しく、誘惑に満ちあふれています。しかし、イエスの第一の戒めは「神を愛しなさい」です。そこで、どこで落ちてしまったのか、いつから神を第一にしなくなったのか、しっかり向き合って考えるように促されています。そして、悔い改めて神にしっかりと立ち返り、初めの行いに戻って、もう一度神を第一にするように導かれています。

燭台は光を象徴するものです。神を第一にしないと、やみの世界と神の世界の区別がつかなくなり、光が見えなくなって、不安が増し加わります。この世界で体験するいろんな楽しみも、神を置き去りにするなら、むなしさを覚えるものです。それを補おうとして、また何かを追い求めるのは、不安が増し加わっている証です。

人から称賛されても、人から良く思われれば思われるほど、人の言葉が気になって不安になります。人はありのままのあなたを受容しているわけではないからです。ありのままのあなたを受け入れてくれるのは神だけです。神はあなたのすべてを知り、罪人であることがわかったうえで、すべてを赦しそのまま受け入れてくださいます。ここに真の平安があるのです。

ニコライ派とは、当時実際にあったグループで、神の愛を肉的な快樂と混同したグループです。それをおかしいと思うのは、神に捕らえられた者だからです。一度神に捕らえられた者は、どんなに神から離れた生活をしようとも何か満足できず、神に反するものに対して違和感を抱きます。それは正しい感覚です。

「聞きなさい」とは、神は、あなたが神のことばを聞くかどうかだけを問うているということです。あなたが納得するかどうかは問うていません。つまり、信じるかどうかだけを問うています。納得したら信じるというのは、信仰ではありません。それでは、聖書を世の中の資料と同じにしています。そうではなく、聖書は神の言葉です。聖書が神の言葉であるとは、誰かが間違いないと証明したからではありません。そんなことは無駄なことです。聖書のことばは、人が証明することはできないし、人が擁護したり弁護したりするものでもありません。なぜなら、神が言われたことだからです。聖書は、私たちが聞く時、神の言葉になるのです。あなたが聞こうとしなければ、あなたにとって聖書は神の言葉にはなりません。神が問うているのは、あなたが聞くかどうか、信じるかどうかだけです。だから、神はあなたに「聞く者になれ」と言われました。ここが重要です。聖書は信仰で向き合うものです。わかったから信じるのではなく、神様に向かって「あなたが言われるから信じます」と、聞く姿勢が最も重要になるのです。そして、聞く者は、勝利を得る者になると教えられています。

勝利を得る者とは、永遠のいのちを受け取っている者です。パラダイスとは、もともとエデンの園を指す言葉で、神の国を表します。「いのち」は神を象徴する言葉で、「神の木の実を食べさせる」とは、神との関係が密接になることを象徴しています。このことを、ヘブル人への手紙では、平安な義の実を結ぶと言っています。神との関係は知識によって築くもの

ではなく、信仰によって築くものです。知識によって神を知ることがないのが神の知恵であると、聖書は語っています。たとえば、イエス様が3日後によみがえったことは、人間の知識では証明できません。証明しようとする人たちもいますが、この世の知恵では証明できないし、証明する必要もありません。必要なのは信じることです。

これが終わりの日に向かってエペソの教会の人たちにイエス様が書き送れと言ったことです。私たちクリスチャンが肉体の死が訪れるまでにすべきことは、神の言葉を聞いて神との信頼関係を築いていくことです。

■ スミルナの教会へ

「また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。」(黙示 2:8-9)

「初めであり、終わりである方」とは、イエス様のことです。イエス・キリストは、過去と現在と未来のすべてを持っています。その方を信じて生きるということは、私たちの過去も現在も未来もすべて確定するということです。私たちの過去は赦されたことが確定し、私たちの未来は復活することが確定します。そして、現在は神がいつもともにいて助けてくれることに確定します。

「あなたの苦しみを私は知っている。」と語られているのは、「あなたは一人ではない」と励ますためです。スミルナの教会の苦しみは経済的な貧しさにありました。しかし、神の目にはそうではなかったのです。たとえ全世界を手に入れても命を損じたら何になるかとイエス様が言われた通り、私たちにとっての本当の富は永遠のいのちを持っていることだからです。永遠のいのちを持っていなければ、死は終わりです。しかし、永遠のいのちを持つ者に死はなく、ただ暮らす場所が変わるだけです。永遠のいのちこそが、私たちにとって真の宝です。その永遠のいのちを手に行っているのだから、あなたがたは実際は富んでいるということを忘れないようにと語られているのです。

さらに、スミルナの教会の人々の苦しみは、同胞であるユダヤ人から迫害を受けていたことです。スミルナは豊かな商業都市で、ギリシャ人の商人とユダヤ人の商人が力を持っていました。その中であって、貧しいユダヤ人たちが救いを求めて教会に来ていたのです。しかし、イエスが約束された救い主であると信じないユダヤ人たちは、彼らを迫害しました。それが、ユダヤ人と自称しているが、実はサタンの会衆である人々です。ユダヤ社会は分裂し、

同じユダヤ人から迫害を受けるという苦しみもわかっているからと、神は励ましておられるのです。

私たちはこの地上で様々な迫害や苦しみを受けます。特に日本ではキリスト教が深く根差していないため、家族の反対を受けることが多々あります。イエス様は、「私は地に平和をもたらすためではなく、剣をもたらすために来た」と言われました。イエス様を信じることで、家族や友人が敵対するようになるだろうけれど、それでも私についてきなさいとイエス様は語っておられます。

「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」（黙示 2:10）

なぜ苦しみを恐れてはいけないのでしょうか。それは、苦しみの時こそ、神の恵みを知る時となるからです。

人は、順調な時より、苦しみの時にこそ聖書の言葉を聞こうとするものです。順調な時は知識として御言葉を聞きますが、本当に苦しくなると、人は神のことばを聞こうとするようになります。私たちが聞こうとしない限り、聖書が神のことばとなって人を変えることはできません。神のことばは、本当にあなたを励まし勇気づけます。だから、苦しみを避けてはいけません。苦しみの中で聖書の言葉を聞くと、私たちは本当に聖書が神のことばであることを知るのであります。聖書は、その内容が正しいと証明できるから神の言葉なのではありません。あなたが聞くから神のことばになるのです。苦しいとき、人を頼ることなく、あなたの苦しみを一番知っておられる神に頼り、聖書を開いてみてください。必ずあなたの心に刺さる言葉があります。それは理屈抜きにあなたに入ってきます。あなたの理解に合わせて神は御言葉を食べさせてくださるのです。

また、あなたに苦しみを与える者は悪魔だと記されている点も重要です。スミルナの教会を迫害していたのはユダヤ人でした。このようなことがあると、私たちはつい人を憎んでしまいがちですが、それは間違いです。敵は悪魔だからです。悪魔は死の力を持つものであって、悪魔がこの世界に死を持ち込み、神と私たちとの関係を分断し、私たちは神を認識できなくなりました。これが死の体になるということです。神が認識できない不安から見える安心を求めるようになり、互いを比較し、その中で安心を得ようとするようになりました。その結果、様々な悪い行いをするようになったのです。つまり、人があなたを苦しめているわけではなく、その背後にある死の力があなたを苦しめているのです。その死の力の源が悪魔です。誰もが死という病気に感染していて、不安の中に生きており、それゆえに人を愛せな

くなり、迫害するようになります。迫害することで自分は正しいと主張し、安心しようとするのです。これが迫害の構造です。だから、人を憎んではいけません。人は憎む対象ではなく、愛する対象です。

この当時は、ローマ帝国の迫害が厳しい時代でした。仲間があなたを売り、拷問を受けることもありました。しかし、神は、「肉体の死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば私はあなたにいのちの冠を与えよう。」と言われました。「いのち」とは神です。神と親密な関係を築くようになるのです。

■ 第二の死

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」(黙示 2:11)

第二の死、つまり肉体の死を迎える時、人は苦しみに出会います。「苦しかったら聞きなさい。」と主は語っておられます。この地上でイエス様を感動させた出来事の一つが、死にそうになっている自分の部下に対して「ただお言葉をいただければ、部下は直ります」と言った百人隊長の信仰です。彼は言葉に権威があることを知っていました。神の言葉が権威を持つのは、私たちが聞く時です。苦しみに会い、神のことばを聞く時、その言葉は神の権威のことばになり、あなたを助けます。

さて、第二の死があるということは、第一の死があるということです。第一の死とはどのようなものなのでしょうか。

「すなわち、アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」(I コリント 15:22)

聖書が教える死とは、神との分離です。アダムの罪によって死が入り込み、すべての人が神と分離し、神を認識できなくなりました。しかし、魂は神の思いを発信し続けているので、魂は神を知っているのに、人はその神を認識できないという状況です。永遠のいのちを知っていても永遠に生きることはできないし、自由を知っていても自由にすることはできないし、神は愛を教えているのに、この世界は条件を付けてしか人を愛せません。このように、私たちは、もともと自分が知っているものを、現実世界では確認することができないので、不安なのです。これが神との分離であり、死の体になったということです。神は永遠ですが、神と分離した私たちは有限になりました。私たちの体が有限性になったこと、これが第一の死です。有限になり、土に帰る存在になった私たちのことを、イエス様ははじめから死人と呼

んでおられます。私たちは生きているようで、実は死んでいます。イエス・キリストが私たちを救うために来られたということは、死んでいた私たちを生かすために来られたということです。人は、どのようにして生かされるのでしょうか。

「ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにかからだを与え、おのこの種にそれぞれのからだをお与えになります。(I コリント 15:35-38)

「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」(I コリント 15:44)

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」(I コリント 15:52)

私たちは神によってからだを与えられ、第二の死と共によみがえって、神の国に移り住むと聖書は教えています。「からだを与える」というギリシャ語は、未来形ではなく現在形です。私たちにはすでに霊のからだを与えられていて、永遠のいのちが与えられているのです。ですから、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない」(黙示録 2:11) と言われているのです。

ですから私たちは、第二の死、つまり肉体の死を恐れることはありません。エペソ、スミルナの教会への手紙には、第二の死に向かって私たちは何をすべきかと言うことが教えられています。それは聞く耳を持ちなさいということです。この地上では様々な苦しみや迫害があるけれども、御言葉を聞いて、それを食べ、神への信頼を増し加えていくようにと神は語っておられます。私たちは終わりのラッパと共に天国に行くので、第二の死とは無関係だからです。

このようにヨハネの黙示録はクリスチャンに対する励ましです。ヨハネの黙示録は恐ろしい終末について書かれていると誤解している人が多いのですが、正しい視点で読み進め、意味を取り違えないように気をつけましょう。